

箱崎 9 ・ 比恵甕棺遺跡

—箱崎遺跡群第14次・比恵甕棺遺跡第1次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第625集

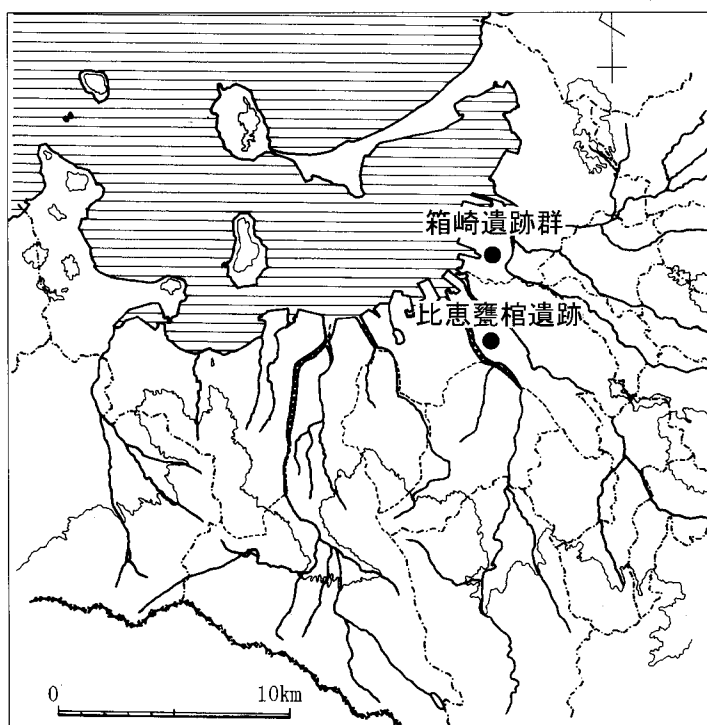
2 0 0 0

福岡市教育委員会

箱崎 9 ・ 比恵甕棺遺跡

—箱崎遺跡群第14次・比恵甕棺遺跡第1次発掘調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第625集



遺跡略号 HKZ-14・HEM-1
遺跡調査番号 9802・9815

2 0 0 0

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くから大陸文化流入の先進地として栄えてきました。市内には多くの歴史的遺産が残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの務めではありますが、近年の再開発に伴いそれらの一部が失われつつあることも厳然たる事実です。本市教育委員会では事前に発掘調査を実施し、やむを得ず全面保存できないものについては記録保存によって後世につたえるべく努めてきました。

本書は共同住宅および倉庫、事務所建設に伴い発掘調査を実施した箱崎遺跡第14次・比恵甕棺遺跡第1次調査の成果を報告するものです。これらの調査では中世における箱崎、山王地区の祭祀に関する遺物が出土するなど、多大な成果を収めることができました。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から資料整理にいたるまで、費用負担など多大なご理解とご協力をいただいた施主の三嶋ミチ子氏、ひかりのくに株式会社、施工の百田工務店、栗本建設工業の方々を始めとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成10(1998)年度に発掘調査を実施した福岡市東区箱崎1丁目所在の箱崎遺跡群第14次調査、および博多区山王2丁目所在の比恵甕棺遺跡第1次調査の報告である。
2. 本書に掲載した遺構・遺物の実測・製図、撮影は福岡市教育委員会埋蔵文化財課の佐藤一郎があたったが、比恵甕棺遺跡第1次調査出土の護符状木製品の赤外線写真撮影については福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏の協力を得た。
3. 本書の執筆・編集は佐藤が行った。
4. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので、活用されたい。

調査番号	9802	遺跡略号	HKZ-14
調査地地籍	福岡市東区箱崎1丁目28-15	分布地図番号	箱崎 34
開発面積	265m ²	調査面積	36m ²
調査期間	1995(平成7)年4月2日～4月23日		
調査番号	9815	遺跡略号	HME-1
調査地地籍	福岡市博多区山王2丁目2-12	分布地図番号	東光寺37
開発面積	500.18m ²	調査面積	198m ²
調査期間	1998(平成10)年5月22日～6月24日		

目次

本文目次

§ 1 箱崎遺跡群第14次調査	
I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査の概要	4
IV. 遺構と遺物	5
1. 検出遺構	5
2. 出土遺物	5
V. 小結	8
§ 2 比恵甕棺遺跡第1次調査	
I. はじめに	9
1. 調査にいたる経過	9
2. 調査の組織	9
II. 遺跡の位置と環境	9
III. 調査の概要	11
IV. 遺構と遺物	11
1. 検出遺構	11
2. 出土遺物	14

表目次

第1表 箱崎遺跡群発掘調査一覧表	2
第2表 箱崎遺跡群第14次調査出土土器計測表	8

挿図目次

第1図 箱崎遺跡群・比恵甕棺遺跡と周辺の遺跡	3
第2図 箱崎遺跡群第14次調査地域周辺図	4
第3図 箱崎遺跡群第14次調査遺構配置図	5
第4図 SK01・05・09実測図	6
第5図 箱崎遺跡群第14次調査出土遺物実測図	7
第6図 銅銭拓影	8
第7図 比恵甕棺遺跡第1次調査地域周辺図	11
第3図 比恵甕棺遺跡第1次調査遺構配置図	12
第4図 SE03井戸，SK04地下式土壙実測図	13
第5図 比恵甕棺遺跡第1次調査出土遺物実測図	14

図版目次

- 図版 1 (1) 箱崎遺跡群第14次調査包含層上面全景 (西から)
(2) 箱崎遺跡群第14次調査包含層下面全景 (西から)
- 図版 2 (1) SK09土壌 (上面, 南西から) (2) SK09土壌 (下面, 北西から)
(3) SK09土壌完掘状況 (北西から) (4) 調査区北壁面土壌 (南西から)
- 図版 3 箱崎遺跡群第14次調査出土遺物
- 図版 4 比恵甕棺遺跡第1次調査全景 (北西から)
- 図版 5 (1) SE03井戸 (東から) (2) SE03井戸 (西から)
(3) SK04地下式土壌 (西から) (4) SE04地下式土壌 (南から)
- 図版 6 比恵甕棺遺跡第1次調査出土遺物

§ 1 箱崎遺跡群第14次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1997(平成9)年10月30日、三嶋ミキ子氏より本市教育委員会に東区箱崎1丁目28-15(面積:265㎡)における共同住宅新築工事に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。

これを受けて埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡群に含まれることから、1998年3月5日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。その後、両者で協議を行った結果、建物築部分80㎡を対象として同年4月2日より発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の組織

調査委託 三嶋ミキ子

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任) 山崎純男(現任)

同課調査第2係長 山口譲治(前任) 力武卓治(現任)

調査庶務 文化財整備課 谷口真由美

調査担当 試掘調査 埋蔵文化財課事前審査係長 松村道博(前任)

同課事前審査係 屋山 洋

調査担当 同課調査第2係 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 尾崎真佐子 尾花憲吾 河津信子 古賀美恵子 為房紋子 播磨博子
山口慶子 吉住シズエ 萬スミヨ 相川和子 田中ヤス子 藤野邦子

その他、発掘調査にいたるまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主の三嶋ミキ子氏、施工の百田工務店をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

II. 遺跡の位置と環境

箱崎遺跡群は博多湾に沿って連なる古砂丘上に立地している。湾岸沿いの砂丘上には大小の遺跡が濃密に分布している。箱崎遺跡群の南西1.5kmの砂丘上には博多遺跡群が位置する。弥生時代中期から集落が営まれ、中世前半からは対外貿易の拠点として繁栄を誇った都市遺跡である。中世後半、蒙古襲来以降には鎮西探題が設置され、大宰府に代わって九州統括の中心となり、その後幾多の戦乱、復興をへて、近世の初めには長崎に国際貿易都市の座を取って代わられる。1978年の地下鉄建設に伴う発掘調査を嚆矢としてこれまでに120次を越す緊急調査が行われ、質、量ともに膨大な資料が蓄積されてきた。箱崎遺跡群の南1kmの砂丘上には堅粕遺跡群が位置する。これまで次にわたる調査が行われ、古墳時代前期の方形周溝墓や後期の土壇墓、古代の集落が検出されている。箱崎遺跡群の南0.3kmには吉塚本町遺跡が位置する。4次の調査が行われ、弥生時代後期から古代にかけての集落が

検出されている。箱崎遺跡群の南東1.5kmには吉塚遺跡群が位置する。次の調査が行われ、弥生時代中期から中世にかけての集落が検出されている。

箱崎遺跡群は西側を博多湾、東側は多々良川支流の宇美川によって画され、この東側にはかつて「筥崎ノ津」と呼ばれた入り江が存在し、筥崎宮の私港として利用されていた。筥崎宮は古代より博多（広義での）の対外交渉を考えるうえで看過できない存在である。筥崎宮は大宰少式藤原真材による八幡大菩薩の託宣の奏聞がきっかけで、923（延長元）年に穂波郡大分宮から那珂郡筥崎に遷座・創建された。大宰府官人による対外貿易の拠点としての発展を祈念すると同時に新羅来寇を祈攘することが、遷座・創建の理由とされる。大宰府官人たちは貿易による利潤を得て中央の権門と深い関係を結ぶようになる。1140（保延6）年には筥崎宮は香椎宮とともに大宰府の府領に編入される。1151（仁平元）年には大宰府検非違所の官人たちが五百余騎の軍兵を率いて筥崎・博多で大追捕がおこなわれ、宋仁王昇後家をはじめ千六百家の資材物を運び取り、筥崎宮に乱入している。筥崎宮社殿はその後、1274（文永11）年の蒙古襲来の際に焼失し、以後数度の火災に遭っている。境内現存している「敵国降伏」の額が掲げられている楼門は1594（文禄3）年に名島城主小早川隆景によって、拝殿および本殿は1546（天文15）年に大内義隆によって建立されたものである。社殿の主軸の方位は現在の周辺の町割りと同じくし、西偏60°を取る。筥崎宮周辺の発掘調査においても現在の町割りと同じ方位を取る遺構が検出されている。

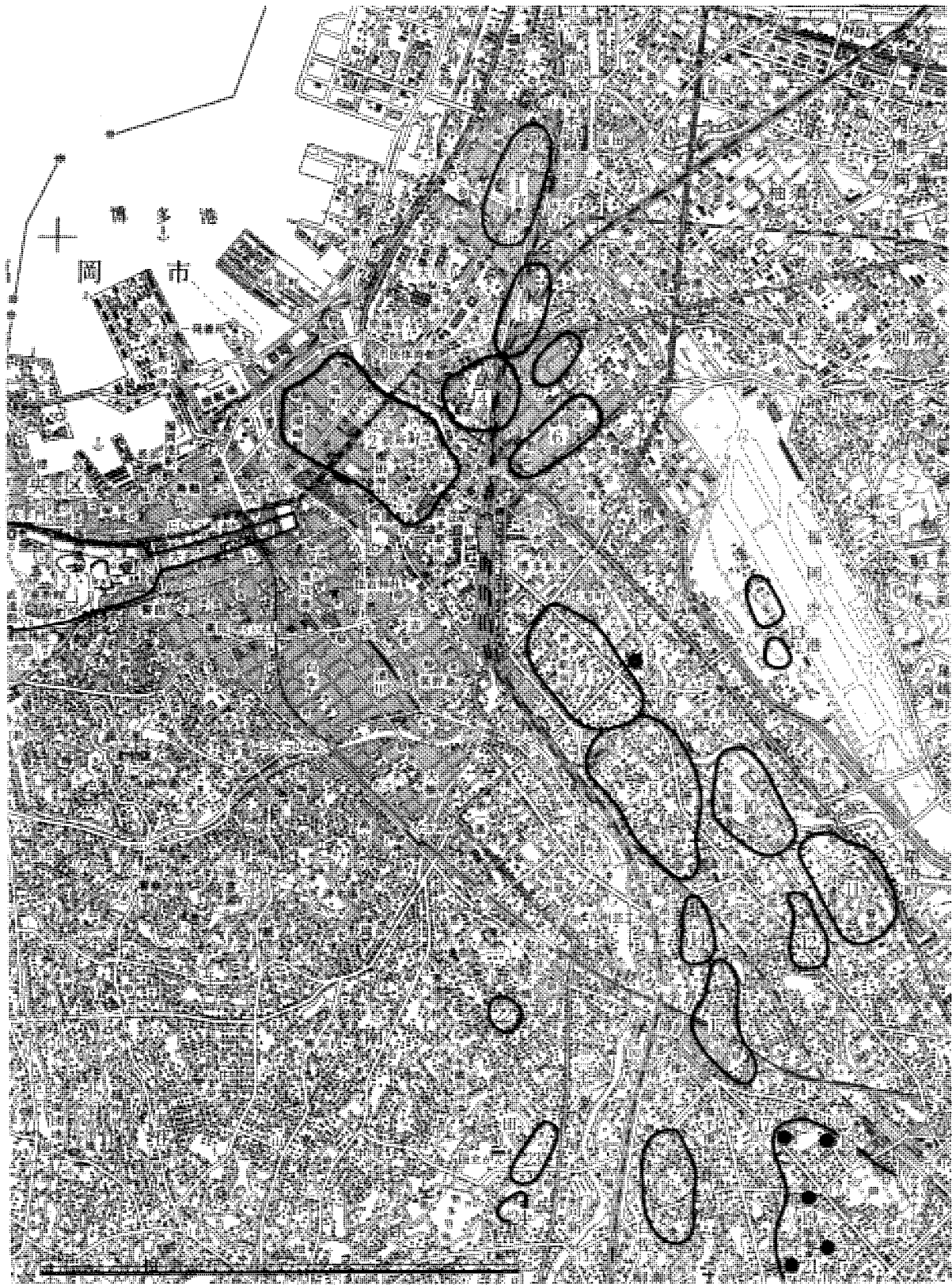
〈参考文献〉

川添昭二編「よみがえる中世Ⅰ 東アジアの国際都市」1988 平凡社

川添昭二「中世九州の政治と文化」1981 文献出版

調査次数	所在地(全て東区)	調査年度	主な遺構の時期	報文
第1次	馬出5丁目地内	1983	12世紀後半～15世紀	市報第193集(1988)
第2次	箱崎1丁目18-32外	1986	10世紀後半～15世紀	県報第79集(1987)
第3次	箱崎1丁目2731-1・4	1989	11世紀後半～15世紀	市報第262集(1991)
第4次	箱崎1丁目2761	1989	11世紀	市年報Vol.4(1991)
第5次	箱崎1丁目25・27	1991	11世紀～15世紀	市報第273集(1992)
第6次	箱崎3丁目8-31	1994	12世紀後半～13世紀	市報第459集(1996)
第7次	箱崎1丁目2711外	1994	12世紀前半～13世紀	市報第459集(1996)
第8次	箱崎1丁目2549-1外	1996	古墳時代前期、12世紀中頃～13世紀	市報第591集(1999)
第9次	箱崎1丁目1935-1	1996	11世紀～13世紀	市報第550集(1998)
第10次	箱崎3丁目地内	1996	12世紀前半～13世紀	市報第551集(1998)
第11次	箱崎3丁目3266-1外	1997	12世紀後半～13世紀	市報第592集(1999)
第12次	箱崎1丁目2606-3-1	1997	11世紀～13世紀	整理中
第13次	馬出5丁目520・521	1997	15世紀	市報第592集(1999)
第14次	箱崎1丁目28-15	1998	12世紀～17世紀	本報告
第15次	箱崎1丁目2615	1998	11世紀後半～13世紀	整理中
第16次	箱崎1丁目2725	1998	11世紀～15世紀	整理中

第1表 箱崎遺跡群発掘調査一覧表

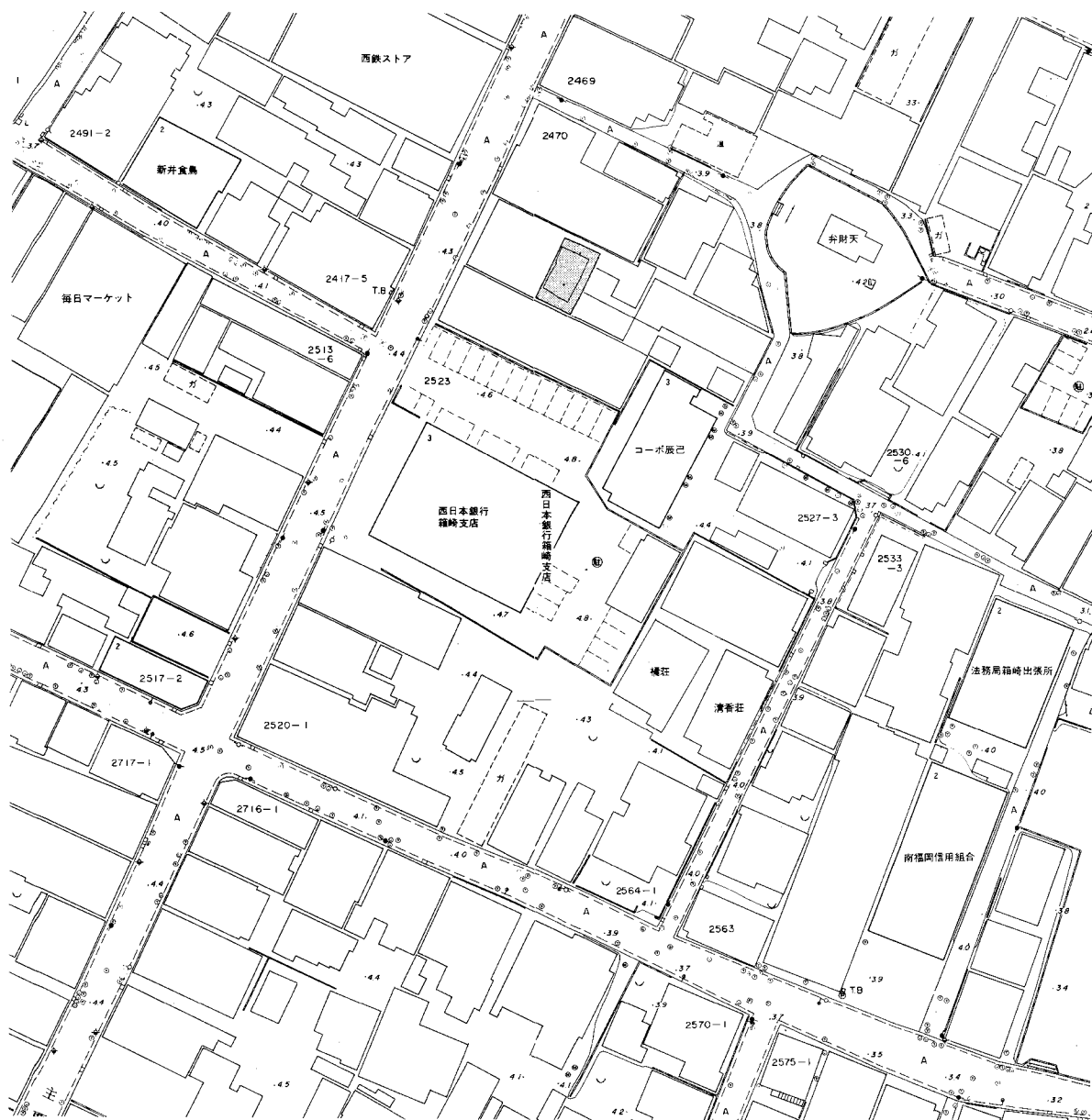


- | | | | |
|----------|---------------|-----------|------------|
| 1 箱崎遺跡群 | 7 比恵遺跡群 | 13 雀居遺跡 | 19 須玖岡本遺跡 |
| 2 博多遺跡群 | 8 那珂遺跡群 | 14 五十川遺跡 | 20 須玖四丁目遺跡 |
| 3 福岡城跡 | 9 比恵甕棺遺跡 | 15 井尻遺跡 | 21 赤井手遺跡 |
| 4 堅粕遺跡 | 10 那珂深サヲ、君林遺跡 | 16 日佐遺跡 | 22 三宅廃寺 |
| 5 吉塚本町遺跡 | 11 板付遺跡 | 17 須玖唐梨遺跡 | 23 野多目遺跡 |
| 6 吉塚遺跡群 | 12 諸岡遺跡 | 18 須玖永田遺跡 | 24 野多目拈渡遺跡 |

第1図 箱崎遺跡群・比恵甕棺遺跡の周辺の遺跡

Ⅲ. 発掘調査の概要

発掘調査は1998年4月2日にバックホーを用いて表土剥ぎから始め、排土は発掘調査区の北西の調査対象外の更地に仮置きした。遺構面は現地表下1～1.5mの暗灰褐色砂質土（遺物包含層）、及び黄白色砂（地山、標高2.9m）上面で確認された。包含層上面で検出された遺構は、土塋4基、柱穴・ピット状遺構14で、内土塋S K01・09は、壁、床面に粘土を貼りつけたもので、箱崎遺跡群では比較的よくみられるものである。遺構の時期は12世紀後半から13世紀前半を主とする。地山上面では、土塋6基、溝2条、柱穴・ピット状遺構80を検出した。溝2条は土塋S K09下面で検出されたもので、土塋の下部構造に関連するものとみられる。遺構の時期は13世紀後半から14世紀前半を主としている。



第2図 箱崎遺跡群第14次調査地域周辺図

IV. 遺構と遺物

1 検出遺構

土壇

SK01 (第4図、図版3) 包含層上面、調査区中央のやや東寄りで見出した。土壇の東側は攪乱を受けている。平面形は隅丸長方形を呈し、全長1.5m以上、幅1.3m、深さ30cmを測る。壁は斜めに立ち上がり、壁面から底面にかけて厚さ2~3mmの淡灰褐色粘土を貼っている。方位はN-30° -Eにとる

SK04 (第4図、図版1) 包含層下面、調査区の南端で見出した。土壇の南東は壁面にかかり、調査区域外に延びる。平面形は隅丸長方形を呈し、全長1.1m、幅0.9m以上、深さ40cmを測る。壁は斜めに立ち上がり、方位はN-30° -Eにとる。埋土から土師器小皿、杯が多量に出土した。

SK09 (第4図、図版2) 包含層上面で一部確認されたが、明確に見出されたのは包含層掘り下げの際である。調査区の北端で見出した。土壇の北東は壁面にかかり、調査区域外に延びる。平面形は隅丸長方形を呈し、全長2.2m以上、幅2.1m、深さ35cmを測る。壁はほぼ直に立ち上がり、壁面から15cm上面に厚さ10~15cmの淡灰褐色粘土を貼っている。底面は三方の壁に沿って幅40~50cmの壁溝がめぐり、その底面の一部で幅20cm、深さ15cmの溝が見出された。壁面には熨斗瓦が立てられた状態がかかっていた。土壇の隅や溝の中には径40cm前後の柱穴を配し、布掘り状を呈する。壁溝中の柱穴の間に地中梁をわたり上部の建造物の基礎とし、底面より15cm上面に粘土を貼りその床面としたのであろうか。方位はN-30° -Eにとる。

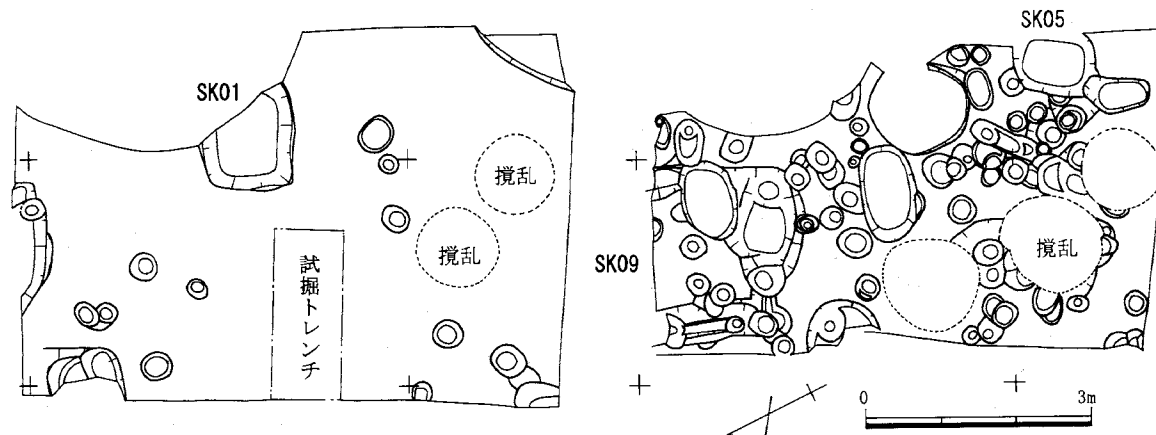
2 出土遺物 (第5図、図版3)

SK05出土遺物

土師器 底部は糸切離しにより、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿 (1~21) 口径8.5~9.7cm、器高1.0~1.6cm、底径6.3~8.0cmを測る。4は器高が1.0cmと低い。口縁下で短く屈曲しその内面は鋭く稜をなし、端部をわずかにくぼめる。細かい砂粒を少量含んだ精良な胎土で、にぶい橙色を呈する。5・9・14は底部の器肉が6mmと厚く、色調は橙~明赤褐色を呈する。

杯 (22~25) 口径15.1~16.8cm、器高2.5~3.2cm、底径10.3~11.9cmを測る。25は底部の器肉が1cmと厚い。



第3図 箱崎遺跡群第14次調査遺構配置図

陶器 四耳壺 (26) 肩部より上は欠失している。樽形の体部の外面は回転ヘラ削り、その他の部位は回転横ナデを施す。削り込まれた外底に墨書「×」が記される。灰色の胎土の灰オリーブの釉が掛けられている。

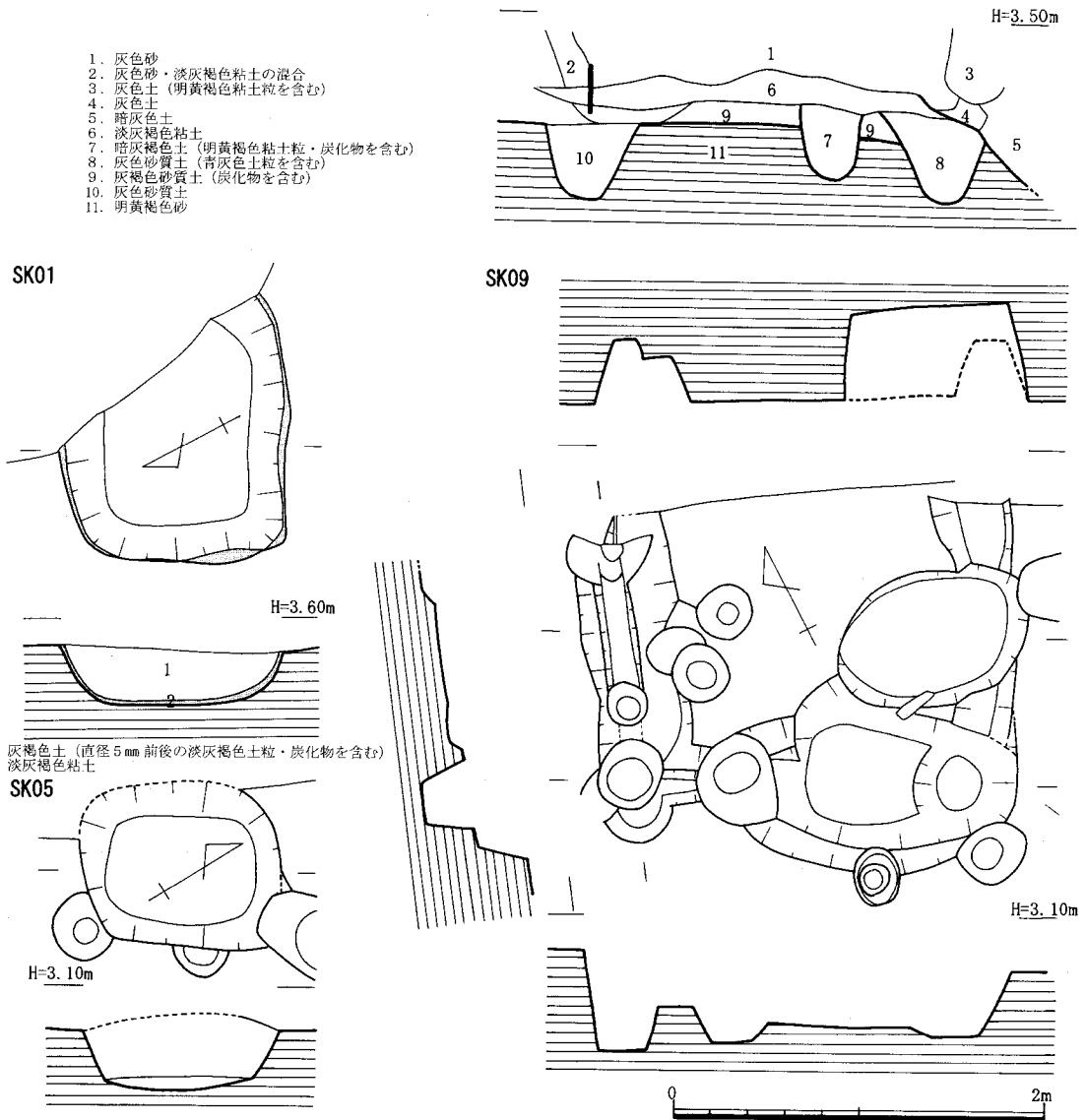
SK09出土遺物

土師器 特小皿 (27) 底部は糸切離しにより、内底まで回転横ナデされる。焼成不良で、器表の一部が剥離している。器周1/3残存の破片からの復元口径6.8cm、器高1.3cm、底径5.0cmを測る。

SK12出土遺物

須恵器 小皿 (28) 底部は糸切離しにより、内底まで回転横ナデされる。胎土には砂粒を少量含み、瓦質に焼成され、色調は灰白色を呈する。器周1/4残存の破片からの復元口径8.7cm、器高2.0cm、底径4.6cmを測る。

土師器 杯 (29) 底部は糸切離しにより、内底まで回転横ナデされる。口縁下外面は強くなでられ、鋭く稜をなし、端部は平坦にされ内傾する。



第4図 SK01・05・09実測図

青白磁 合子 (30) 側面に蓮華座を型押ししてつくりだす。胎土は白色を呈し、釉は灰白色透明を呈する。内底および体部外面下半以下は露胎である。

Pit47 出土遺物

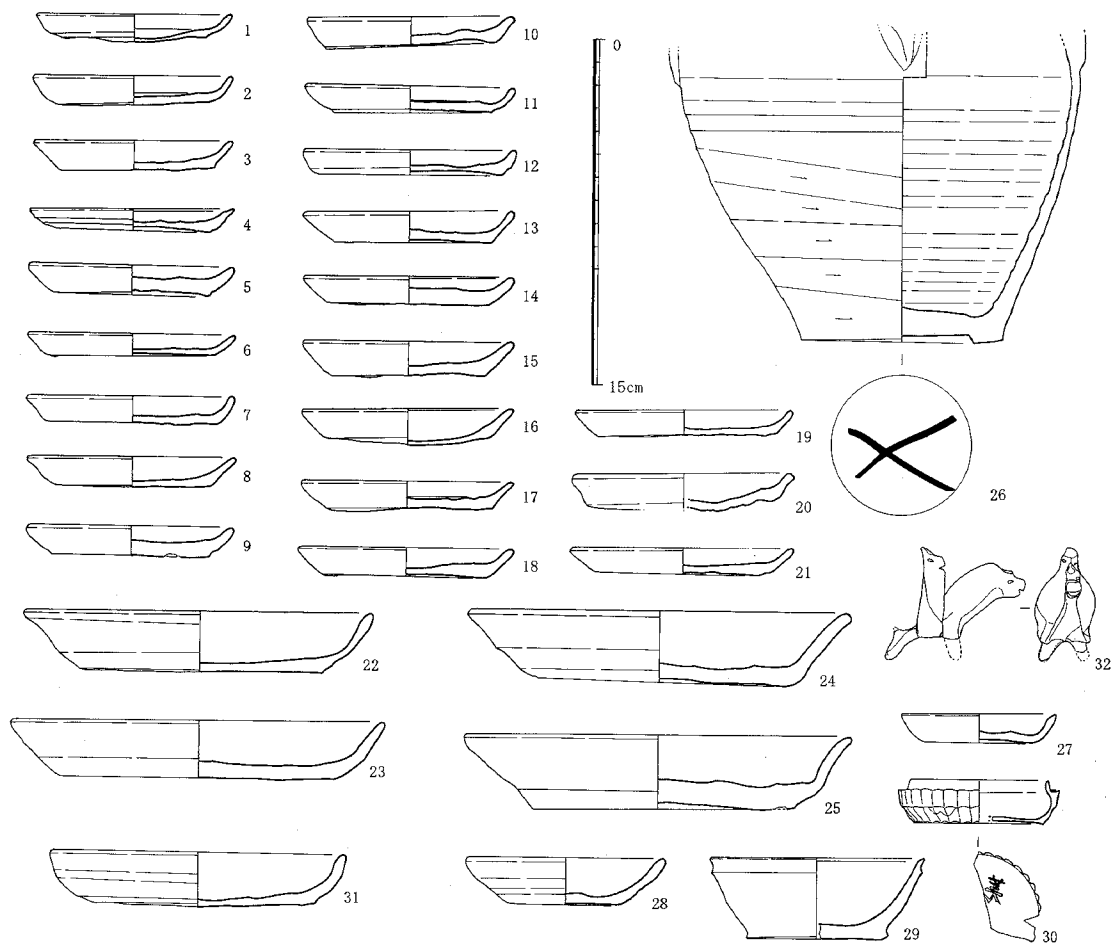
土師器 杯 (31) 底部は糸切離しにより、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。底端部の内側には切離しの際の段がつく。口径12.9cm、器高2.4cm、底径10.2cmを測る。

Pit16 出土遺物

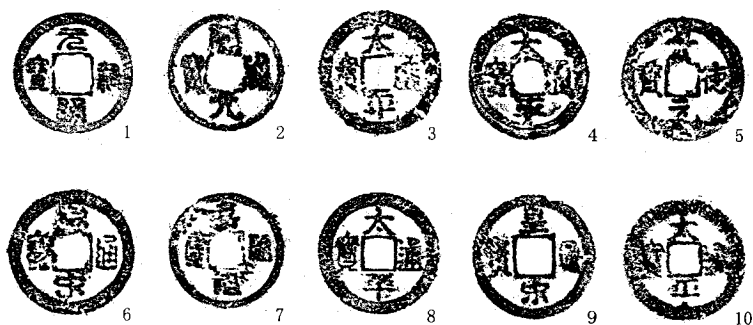
土製騎馬人物像 (32) 手ひねりで成形され、後頭部は髷か烏帽子を表現するような突起が付き、目、口は前方からの刺突で、手、足は体部下方のくびれや稜線で表現している。馬はたてがみが大きくひねり出され、目、口は人物と同様に前方からの刺突で表現され、脚部は短い。左前足、尻尾は折失している。胎土は精良で、色調は浅黄橙色を呈する。全長61mm、全高49mm、幅26mmを測る。同様の人物像が博多遺跡群第60次調査Ⅱ面D、E-6区から出土している。人馬一体のものでは伝八女郡出土のものが個人蔵されている。ほぼ同形同寸であるが、馬の脚部は長く、表現は幾分写実的になっている。人物の頭部には烏帽子を頂き、手足は明瞭で狩衣を着ている。^{註1}
^{註2}

註1 福岡市教育委員会「博多30」 1992

註2 山村信榮「中世の素焼き人形考」『博多研究会誌—第5号—』1997



第5図 箱崎遺跡群第14次調査出土遺物実測図



第6図 銅錢拓影

銅錢 (第6図)

遺構・包含層から破損・銹化が著しいものも含め12点が出土した。1はS K09出土、元祐通寶(初鑄年1086年)、2～7はS K09出土、2は開元通寶(初鑄年621年)、3・4は太平通寶(初鑄年976年)、5は景德元寶(初鑄年1044

年)、6は皇宋通寶(初鑄年1039年)、7は嘉祐元寶(初鑄年1056年)である。他に破損品で渾もしくは治口元寶と読めるもの、銹化が著しく判読不能のものが各1点出土している。8はPit50出土、太平通寶、9は包含層出土、皇宋通寶、10は攪乱出土、太平通寶である。

V. 小 結

狭隘な調査区域での調査であったが、検出された方形の土壇の方位は宮崎宮社殿の主軸の方位、それに基づく現在の周辺の町割りと同じ西偏60°を取っていた。S K09は博多遺跡群でも多く検出されている方形堅穴土壇の一種であるが、床面に粘土を貼っている。箱崎遺跡群第11次調査ではほぼ同じ時期、規模の土壇S K029が検出されており、板材や杭が比較的良好に遺存していた。床面より15cm上に炭化物層が広がっていた。

挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	挿図番号	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)
S K05				12.	9.3	1.1	7.7	24.	16.6	3.1	11.0
土師器小皿				13.	9.2	1.4	6.8	25.	16.8	3.2	10.3
1.	8.5	1.3	6.3	14.	9.2	1.2	7.1	S K09			
2.	8.7	1.3	6.6	15.	9.2	1.5	6.8	土師器特小皿			
3.	8.7	1.2	6.8	16.	9.2	1.6	7.1	27.	6.8	1.3	5.0
4.	8.8	1.0	6.6	17.	9.3	1.2	7.2	S K12			
5.	8.9	1.3	6.7	18.	9.4	1.3	7.2	須恵器小皿			
6.	9.0	1.0	7.0	19.	9.5	1.1	7.7	28.	(8.7)	(2.0)	(4.6)
7.	9.0	1.2	7.3	20.	9.6	1.6	8.0	土師器杯			
8.	9.0	1.3	6.7	21.	9.7	1.1	7.4	29.	(9.3)	3.5	(6.1)
9.	9.0	1.3	6.9	土師器杯				Pit47			
10.	9.0	1.3	7.3	22.	15.1	2.7	10.5	土師器杯			
11.	9.1	1.2	7.0	23.	16.2	2.5	11.9	31.	12.9	2.4	10.2

第2表 箱崎遺跡群第14次調査出土土器計測表

§2 比恵甕棺遺跡第1次調査

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1998(平成10)年2月10日、ひかりのくに株式会社より本市教育委員会に博多区山王2丁目2-12(面積:500.18㎡)における事務所・倉庫建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵甕棺遺跡群に含まれることから、1998年3月17日に試掘調査を実施し、遺構を確認した。その後、両者で協議を行った結果、建物築部分247㎡を対象として同年6月22日より発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の組織

調査委託 ひかりのくに株式会社

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任) 山崎純男(現任)

同課調査第2係長 山口讓治(前任) 力武卓治(現任)

庶務担当 文化財整備課 谷口真由美

調査担当 試掘調査 埋蔵文化財課事前審査係長 松村道博(前任)

同課事前審査係 屋山 洋

調査担当 同課調査第2係 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 尾崎真佐子 尾花憲吾 河津信子 古賀美恵子 為房紋子 播磨博子
山口慶子 吉住シズエ 萬スミヨ 相川和子 田中ヤス子 藤野邦子

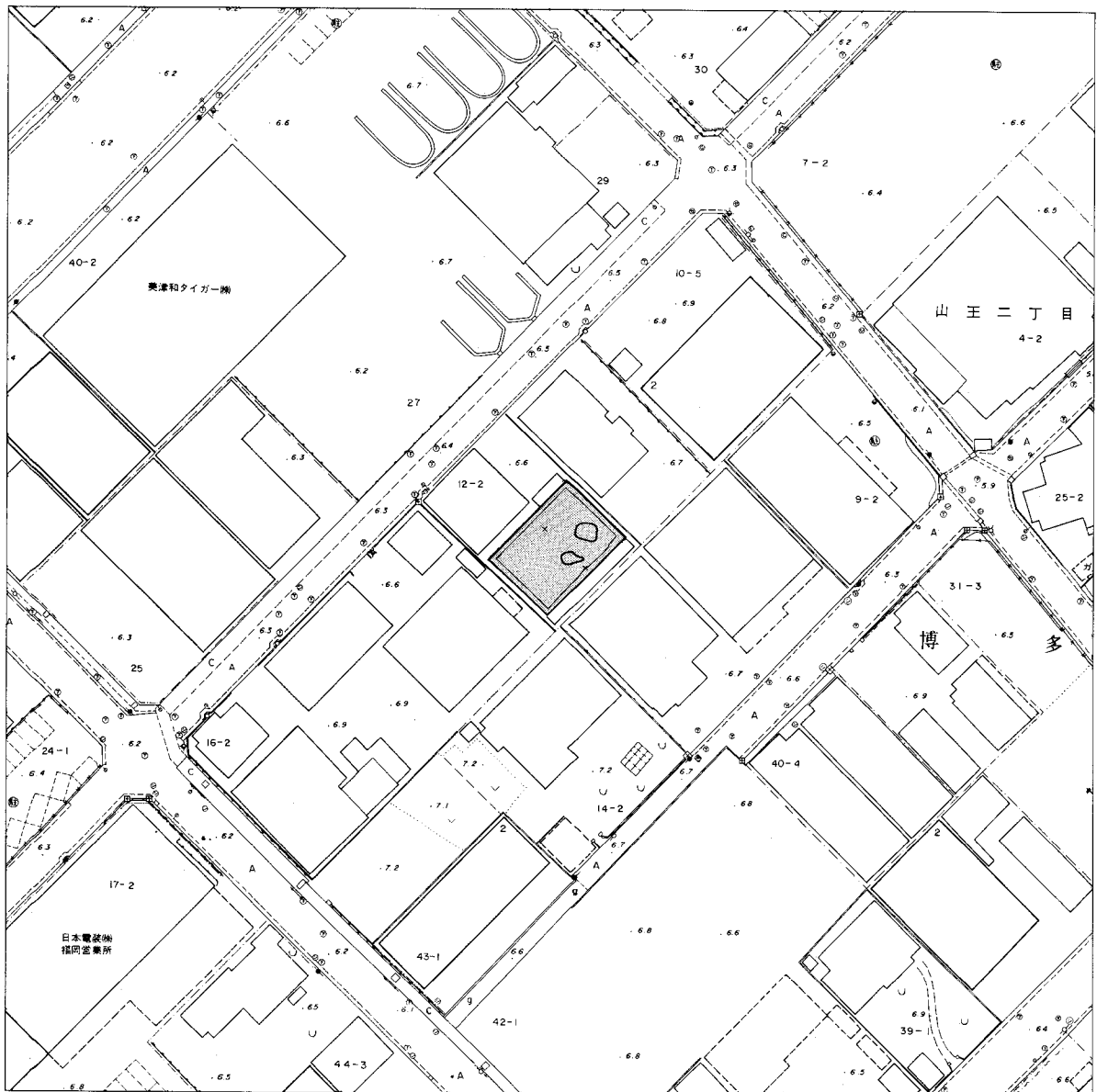
その他、発掘調査にいたるまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について施主のひかりのくに株式会社、施工の栗下建設工業株式会社をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

II. 遺跡の位置と環境

比恵甕棺遺跡は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する。その範囲は南北170m、東西140m、標高は6.2~6.6m前後を測る。比恵甕棺遺跡が位置する台地は、どの南西の春日丘陵から標高を下げながら延びる低丘陵上に立地する。比恵甕棺遺跡南西の台地上には比恵・那珂遺跡群、さらに南側には井尻遺跡群と「奴国」の拠点とされる遺跡群が丘陵に沿って分布している。弥生時代にはそれらの遺跡の他に南東側の台地上の板付遺跡など大規模な集落が営まれている。古墳時代以降も比恵・那珂遺跡群を始め丘陵上では集落が展開し、那珂川流域には首長墓とされる前方後円墳が築造される。比恵遺跡群では6世紀後半代の大型倉庫・建物群、柵の跡が検出され、536(宣化元)年に設置された「那津官家」に関する遺構と推定されている。那珂遺跡群では6世紀末から7世紀始めにかけての古い時期の瓦が出土し、明確な遺構は検出されていない

が、「那津官家」もしくはその後身に関連する官衙的な施設が営まれていたと考えられている。

福岡平野の中央部、御笠川下流域に位置する比恵の名は戦国期にはすでにみえる。管崎宮に伝わる大宮司家田村文書の中の天文6(1537)年の某置文に「比恵村居屋敷」とある。比恵の名は比叡山の山王を勧請したことに由来する。現在、本調査地の北北西約400mの位置に山王を祀る日吉神社がある。北部九州では天台宗の浸透に伴って各地で山王社が勧請され、地域における鎮守神として崇敬されてきた。山王の神の使いは猿で、後述するように本調査では弓を弾く猿の姿を描いた護符状の木製品が出土しており、戦国期における山王信仰の実態を示すものになるうか。大宰府史跡第57次調査観世音寺子院の一つである推定金光寺跡暗茶色土層からも弓を弾く猿の姿を描いた護符状の木製品(報告書では守護札状木製品)が出土している。護符状木製品は暗茶色土層出土遺物から15世紀後半から16世紀前半の時期と考えられる。推定金光寺は観世音寺の中心伽藍の北方約500mの地点に所在し、平安時代末から天台宗と深く関わってきた観世音寺の北方約100mには現在日吉神社がある。



第7図 比恵甕棺遺跡第1次調査地域周辺図

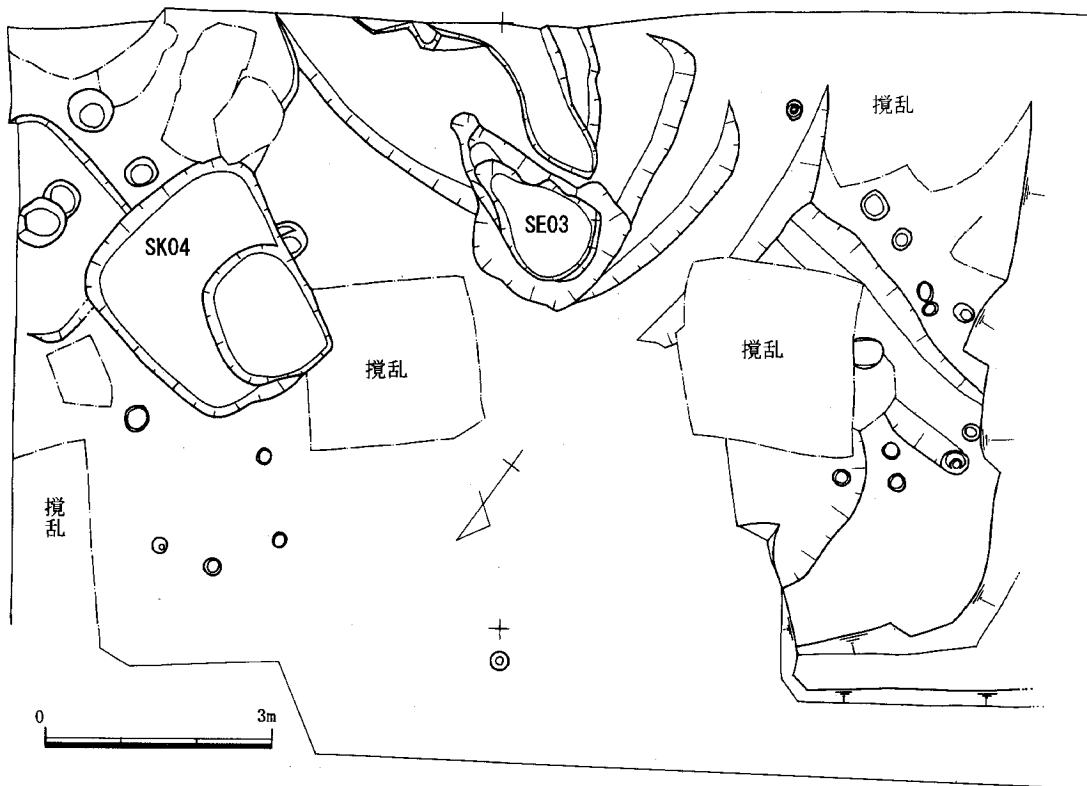
Ⅲ. 発掘調査の概要

発掘調査は1998年5月25日にバックホーによる表土剥ぎから始め、排土は調査区北西の調査対象区域外の駐車場スペースに仮置きすることとした。調査区域の全域は構成に削平を受けており、遺物包含層は残存しておらず、既存の建造物の基礎による攪乱も著しく、現地表（客土）下30～60cmのローム層下部で遺構を検出した。標高は2.9mを測る。検出した遺構は、15世紀後半～16世紀前半の溝状遺構2条、14世紀後半～15世紀前半の井戸1基、6世紀後半の柱穴・ピット状遺構数個である。井戸からは完形の青磁碗1、弓を弾く猿の姿を描いた護符状の木製品が出土した。その他、各時期の遺構から弥生土器片（中期中頃～後半）が出土しており、その中には甕棺片もみられる。

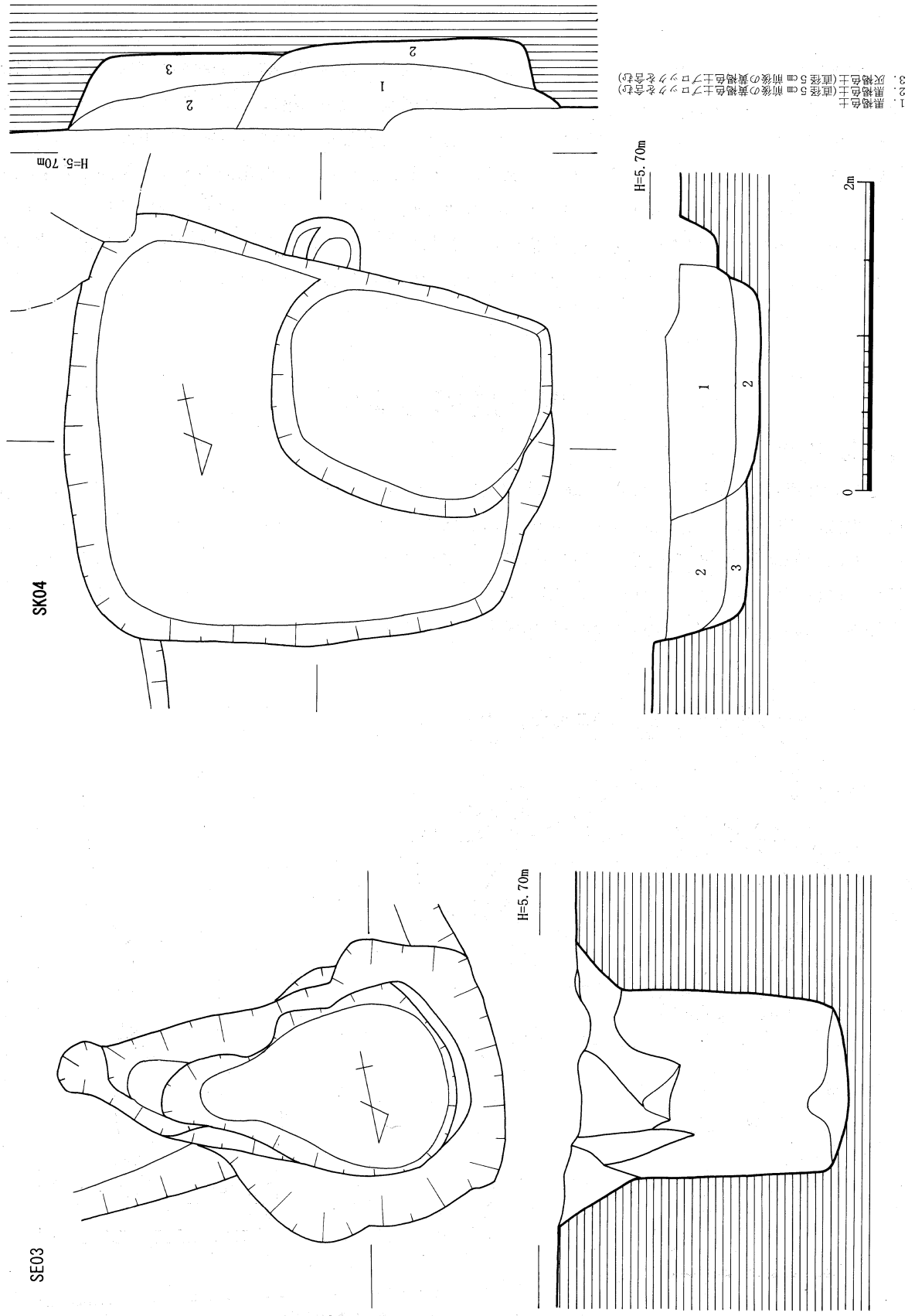
Ⅳ. 遺構と遺物

1 検出遺構

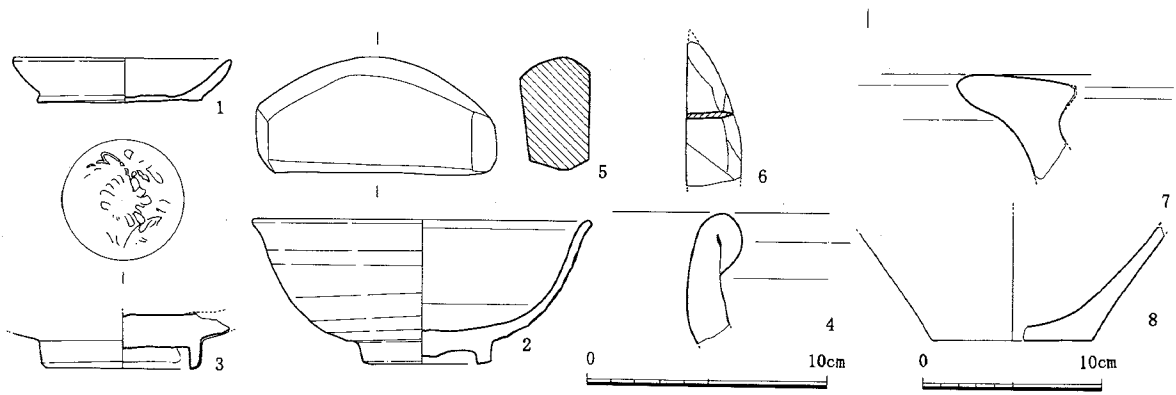
S E03井戸（第9図、図版5） 調査区中央のやや南東で検出した。平面形は不整円形を呈し、遺構の東側は階段状の谷となる。直径2.0～3.0mを測る。底面は八女粘土層まで掘り下げられている。深さ2.0m、底面の標高2.7mを測る。井戸枠やその痕跡は検出されなかった。遺構東側の階段状の谷は解析を受けてはいるが、井戸枠を掘り出す際の足場として掘り込まれた可能性も考えられる。井戸埋土から完形の青磁碗、猿を描いた護符状木製品などが出土した。



第8図 比恵甕棺遺跡第1次調査遺構配置図

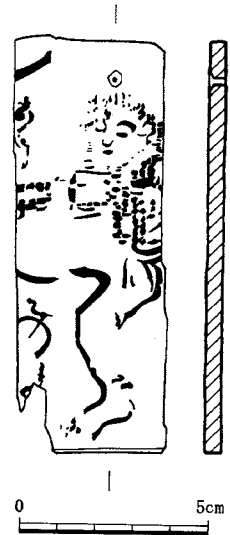


第9図 SE03井戸、SK04地下式土壙実測図



第10図 比恵墓棺遺跡第1次調査出土遺物実測図

S K04地下式土壇（第9図、図版5） 調査区の東側で検出した。東西に長い隅丸長方形の土壇である。東西の長さ3.2m、東側の辺2.7m、西側の辺2.0mを測る羽子板状を呈する。残存する深さ50cmは測る。壇内の南西隅に東西の長さ1.9m、南北の長さ1.4mの隅丸長方形の掘り込みがある。S K04が埋没した後の掘り込みで、底面はS K04より10cm低い。



2 出土遺物

SE03出土遺物（第10図、図版6）

土師器 小皿（1） 底部は糸切り離しにより、内底まで回転横ナデされる。口径8.9cm、器高1.8cm、底径6.7cmを測る。

青磁 碗（2・3） 2は口縁部が外反するD-1類で、体部外面上位まで施された回転ヘラ削りの痕跡は鋭く明瞭に稜をなす。高台の外側まで施釉される。3は釉が削り取られ露胎の内底見込みに印花文を施した底部片で、高台の内側の途中まで施釉される。

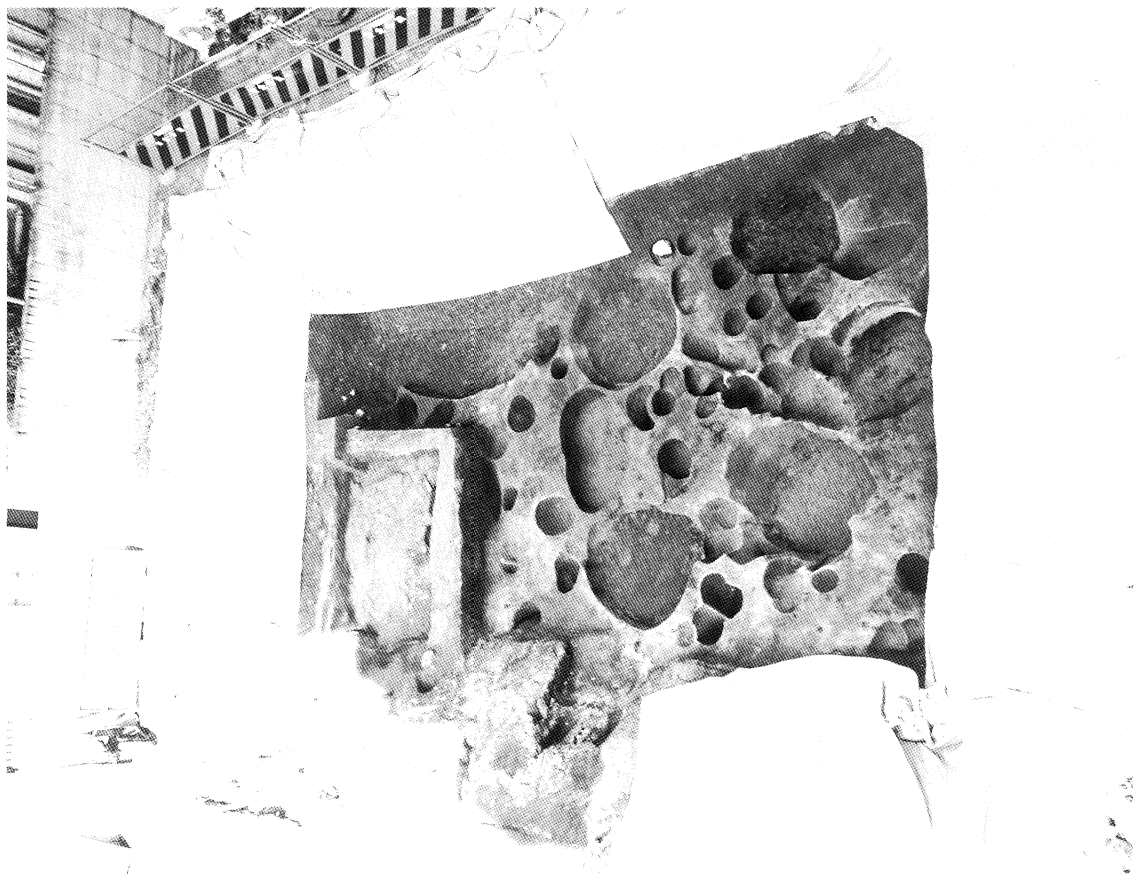
備前焼 壺（4） 口縁を折り返し幅広の玉縁状としている。

手代木（5） 糸を繕るための道具の一つで、大宰府史跡第78次調査SG2130下層腐植土層、博多遺跡群博多駅築港線関係第3次調査698号土壙から同形のものが出土している。

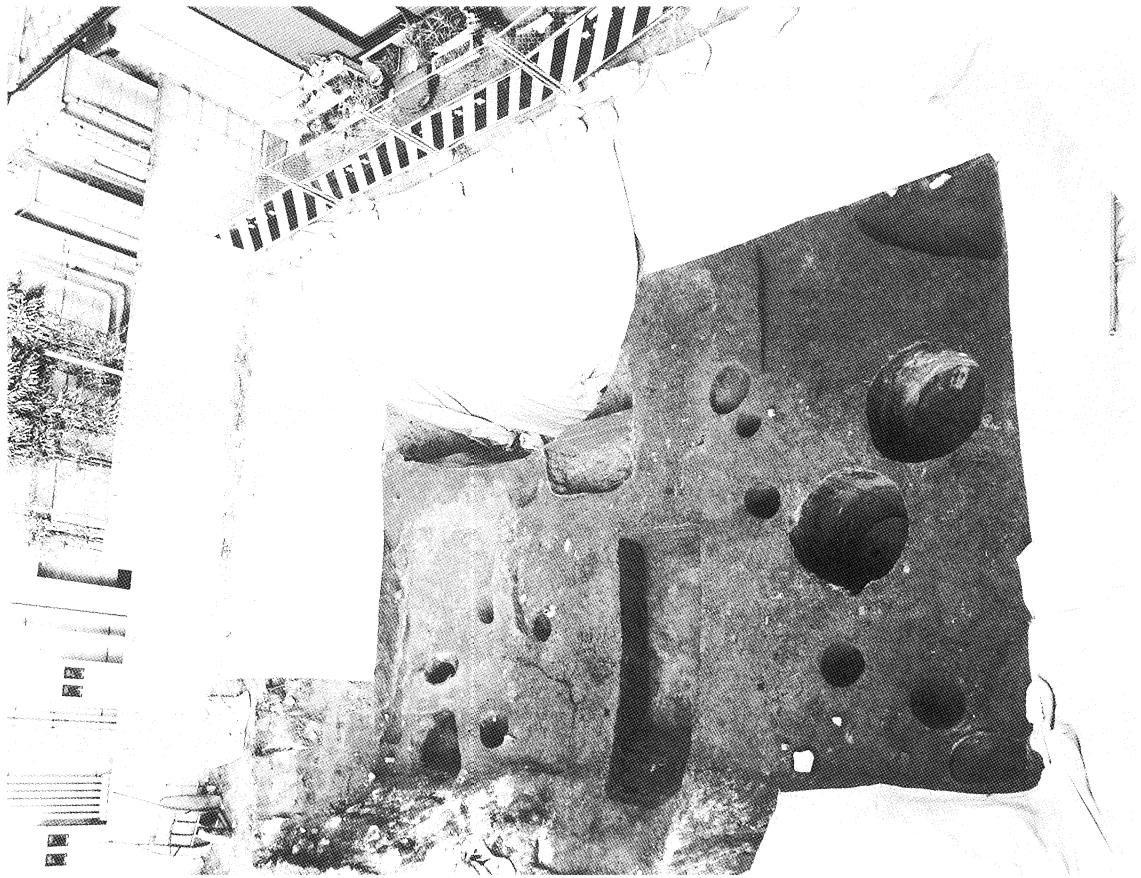
切出し形木製品（6） 刃部をもつ先端の破片で、篋あるいは糸巻の部品とみられる。

護符状木製品（7） 厚さ4mmの板材の上部中央に径2mmの孔を穿つ。両側面は欠失しているが、表に弓を弾く猿の姿を墨で描く。判読不能の墨書もみられる。

圖 版



(1) 箱崎遺跡群第14次調査包含層上面全景 (西から)



(2) 箱崎遺跡群第14次調査包含層下面全景 (西から)

図版 2



(1) SK09土壇（上面、南西から）



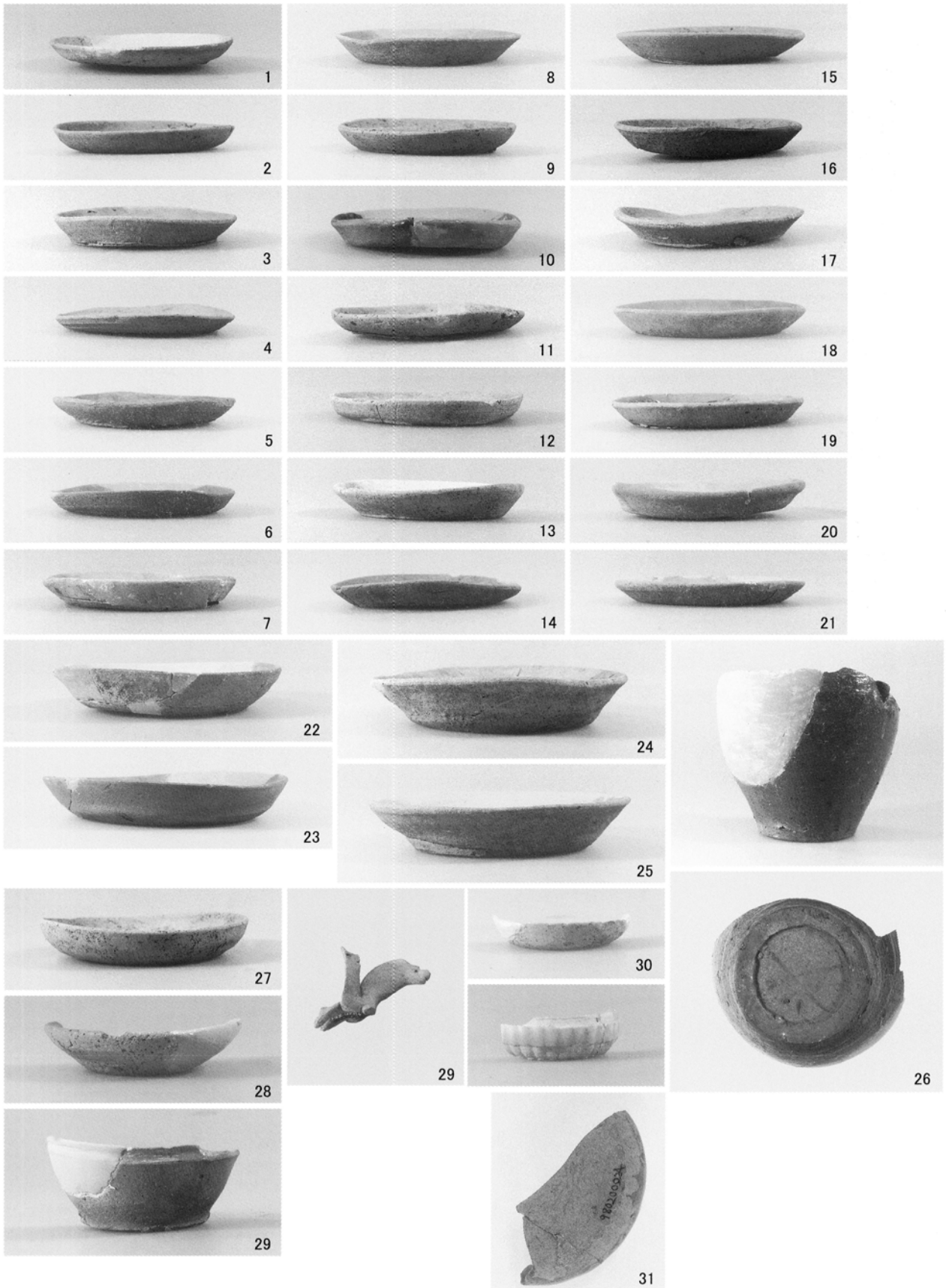
(2) SK09土壇（下面、北西から）



(3) SK09土壇完掘状況（北西から）



(4) 調査区北壁面土壇（南西から）

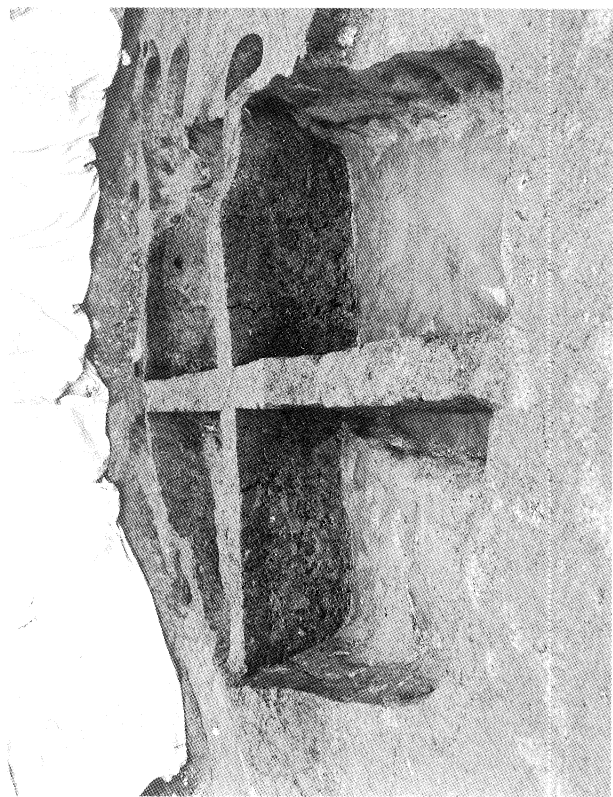


箱崎遺跡群第14次調査出土遺物

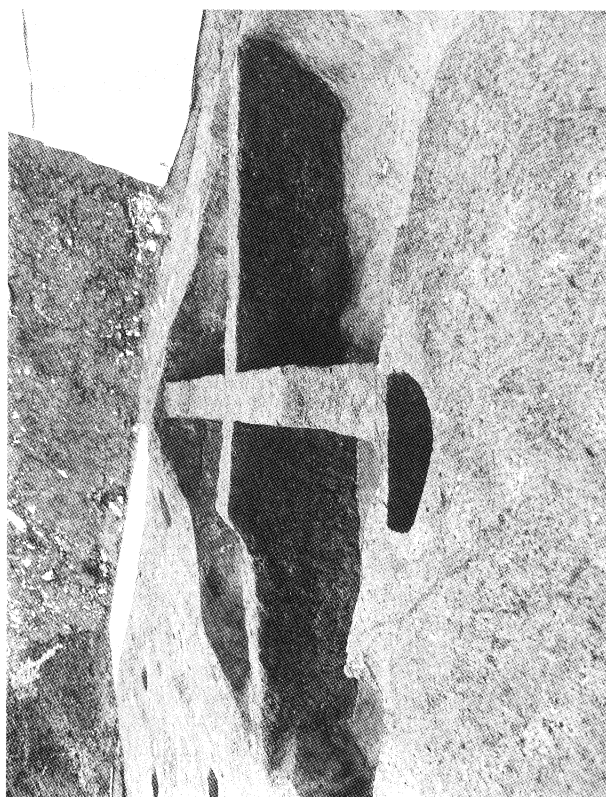
図版 4



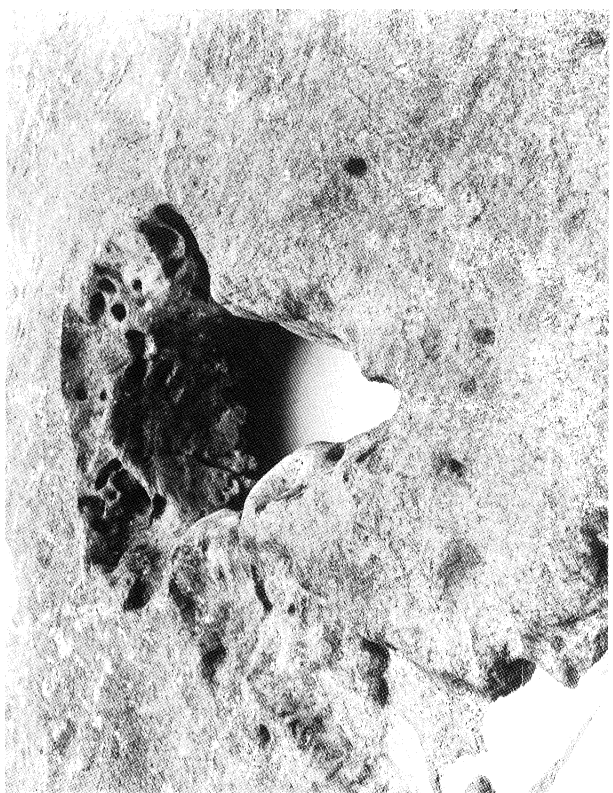
比恵甕棺遺跡第1次調査全景（北西から）



(3) SK04地下式土壙 (西から)



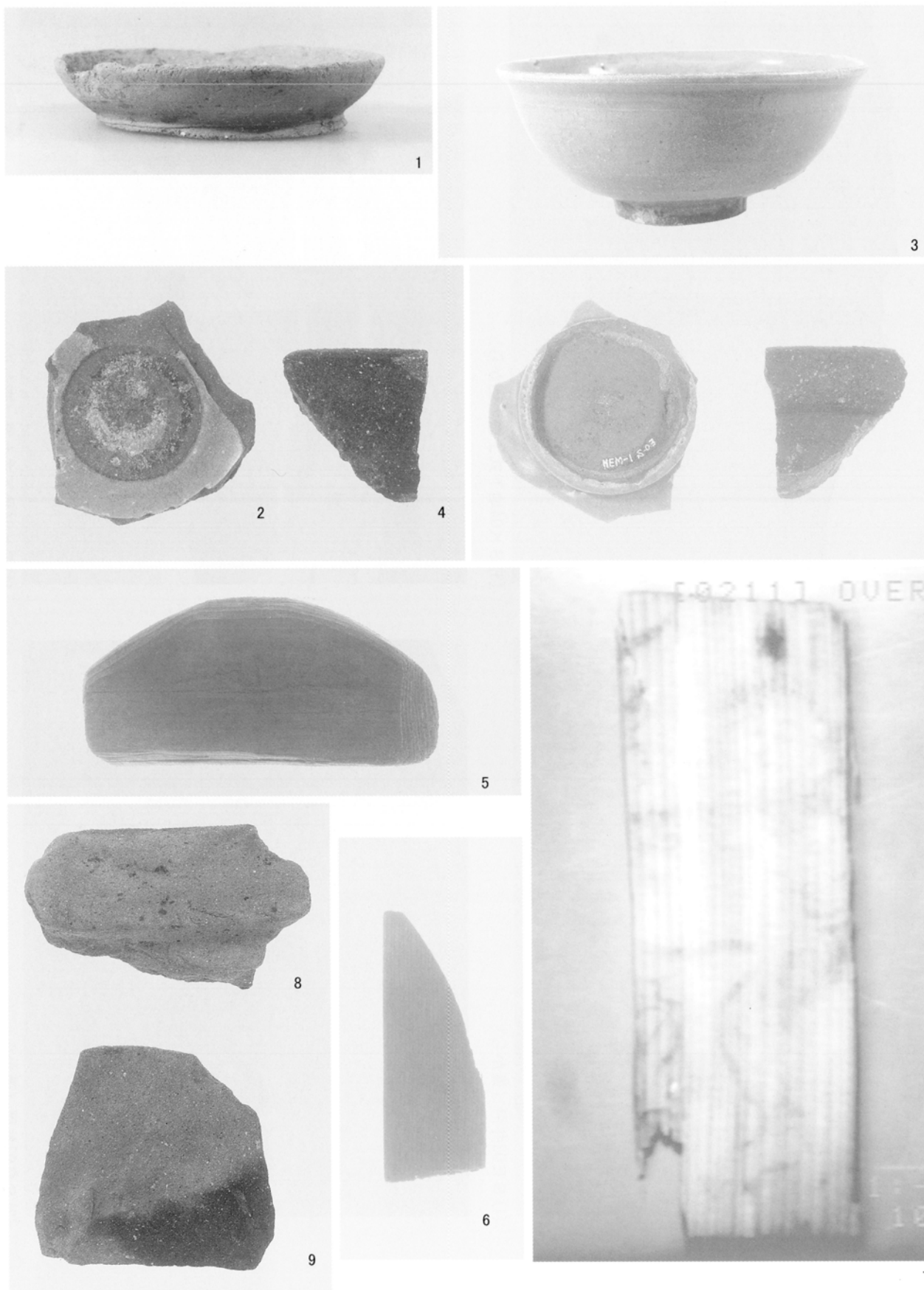
(4) SK04地下式土壙 (南から)



(1) SE03井戸 (東から)



(2) SE03井戸 (西から)



比惠甕棺遺跡群第1次調査出土遺物

箱崎9・比恵甕棺遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第625集

2000年（平成12年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
(092)711-4667

印刷 株式会社 嶋井精華堂
福岡市博多区堅粕4丁目1番12号
(092)611-4960

